

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

北京の天使

1992年・中国映画・90分

配給/ワコー、シネマ・ルネサンス

2004 (平成16) 年7月1日鑑賞

<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004>

Data

監督: 王君正 (ワン・ジョルジョン)

出演: 石晨 (シー・チェン) / 李丁

(リー・ティン) / 肖雄 (シ

ヤア・シオン)

👁️👁️ みどころ

この映画は、おじいちゃんと6歳の男の子との間の心の交流と、男同士(?)の友情を描く物語。ママの帰りを待ちながら、北京のまちで2人で過ごした6年間。そこには、楽しい思い出がいっぱい。ママが帰国した後、ボクにもいろいろと生活の変化が押し寄せてきたけど……。おじいちゃんは、今頃天国で……。?天才子役の演技が光る、心暖まる珠玉の一作を涙とともに……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<おじいちゃんと孫との男の友情>

チェンチェン (石晨) は、今6歳の男の子。今日は幼稚園に行く前に、おじいちゃんのエイエエ (李丁) と北京にある故宮の広場で凧揚げ。おじいちゃんは、凧揚げの天才だ。でも、なかなかボクにやらせてくれない。ボクだって、凧揚げは上手なんだけど……。やっとな凧糸をボクに渡してくれた。それ見ろ、凧はどんどんあがっていくぞ……。

あれ、おじいちゃんは自転車に戻り、席にもたれてしまった。疲れたのかなあ。あつ、心臓の薬を飲んでもらわなくっちゃ。

ボクはこのまま、凧揚げを続けたいのに、おじいちゃんはお仕事、ボクは幼稚園、だって。まあ仕方ないか。今日の凧揚げは、これで切りあげよう。

さあ今度は、おじいちゃんを自転車の後ろに座らせて、ボクが自転車をこいでいくぞ。ボクは自転車だってこげるんだ。

おじいちゃんを後ろの席に乗せ、一生懸命三輪自転車をこいでいくチェンチェン。この冒頭シーンだけで、この映画の暖かさが十分に伝わってくるほどだ。

<家事だってちゃんと分担>

お家に帰って食事が終わると、ボクは食器洗いの後片付け。おじいちゃんは洗濯物を干している。おじいちゃんのエプロン姿もよく似合うよ。さあ、家事が終わったら、2人でテレビだ。『一休さん』をやってるよ……。ここでおじいちゃんもボクも、いたずらしながらちょっとふざけあいだ。そして、夜、おじいちゃんと話をしていると、眠くなってきた……。

<今日は郵便配達のお手伝い>

今朝、おじいちゃんはおめかし中。制服を着て帽子をかぶると、将軍のよう。こんな制服を着てお仕事に出かけて行くおじいちゃんのお仕事は、郵便配達員。ちょっと心臓が悪いけど、頑張っって今日も郵便物の配達に行くんだ。ボクは幼稚園に行くより、おじいちゃんのお仕事を手伝いたいので、それをおねだり。「ダメだ。幼稚園に行きなさい」と言われたけど、何度も何度も頼んだら、オーケーしてくれた。うれしいなあ……。

北京の胡同（フートン）のまちの中を探し歩いて、やっとアパートに着いたのに、停電でエレベーターが停まっている。仕方ないので、12階までフーフー言いながら階段を上って、手紙のお届けだ。やっと上がると、家の中に案内してくれた。ところが、やさしそうなおじいさんが、その手紙を読むと何かおかしい。この手紙は、同姓同名の人へのまちがいの手紙だったんだって……。

<お手紙を天国まで……>

ボクとおじいちゃんは、その手紙の宛名の人をやっと探しあてたのに、その人はもう死んでしまっていた。だから、ボクとおじいちゃんは、この手紙を佩にのせて、天国に届けてあげることに……。 「天国って本当にあるの」と聞くと、おじいちゃんは、「あるよ」って。そして、「本当に天国に届くの」と聞くと、「届くよ」って。「それじゃ、おじいちゃんが死んだ後は、ボクが手紙を書いて、天国に届けるにはどうすればいいの?」と聞くと、「天国のおじいちゃん宛と書きなさい」って。これはいいことを聞いた。ボク、きっとそうするよ……。

<ママとのご対面>

こんな楽しいおじいちゃんと孫の2人の共同生活だったが、そうなったのは、チェンチェンが生まれた直後、チェンチェンを北京に残し、両親が海外に赴任したため。チェンチェンの服装やアパートでの生活ぶり、そして、幼稚園への送り迎えからみても、彼らが一定の生活水準にあることがわかる。そして、「家庭の事情」も、「もうすぐママが帰ってくるよ」という2人の会話からもよくわかる。

そして、今日はママ（肖雄）が、空港に到着する日。チェンチェンとイエイエは、このお迎えだ。そして、チェンチェンとママとのご対面！ママは大きくなった可愛いチェンチ

エンを見て感激いっぱいだが、チェンチェンはすぐにママになつけない様子。そりゃそうだろう。それもやむをえない。

<ストーリーは夢から現実へ>

どうも、このママは、「海外赴任」していたという設定からしても、かなりリッチな様子。これは、ママの服装をみても、また山のようなチェンチェンへのおみやげ品をみてもよくわかる。またこの映画からは、なぜパパが登場しないのかはよくわからないが、それはこの映画を味わうについては枝葉末節の問題で、詮索する必要なし。

ママが帰ってきてから、数日の間に、チェンチェンたちの生活状況は激変した。

第1は、部屋の模様替え。古い家具はすべて廃棄されて、部屋はモダンな洋間となり、部屋の中へはスリッパをはいて入ることに・・・。

第2は、食事。今までのおじいちゃんがつくっていた中華料理から、ナイフとフォークを使った西洋料理へ。

第3は、ママの教育方針。ママの言うところによると、これからはボクは外国語の勉強とピアノのお稽古に行くことになるんだって・・・。

おじいちゃんと2人の楽しい夢のような生活は終わりを告げ、ママが言うところの「10億人との競争」に生き残っていくための現実が、今チェンチェンに始まろうとしていた。

<ママは悪い女だ！ボクはママが嫌いだ！>

ボクとおじいちゃんのお友達はモルモット。カゴの中に入っているけど、食事の時もテレビを見るときも、そして寝るときもいつも一緒。だけど、ママはこのモルモットが嫌いらしい。最初見た時ビックリしていたし、食事のとき一緒に食べていると、「下に置きなさい！」って言われてしまった。そして、挙げ句の果てに、部屋の模様替えをしているとき、誤ってこのカゴをベランダから下に落としたため、モルモットは死んでしまった。「わざとじゃないのよ・・・」とママは言うけど、ママは悪い女だ。ボクは、こんなママが嫌いだ・・・。

<父と娘そして孫それぞれの心の葛藤>

ママは、おじいちゃんの実の娘。だから、ママが海外赴任の間、おじいちゃんがボクの世話をしてくれたわけだ。しかし、おじいちゃんは年をとっている。そこでおじいちゃんは、ママが帰ってきた以上、ママが責任をもってチェンチェンを育てるべきで、おじいちゃんは田舎に帰るとママに説明。そして、ママもこれに納得。だけど、ボクはそんなこと聞いてない！

今日、幼稚園に迎えに来てくれたのがママだったけど、家に帰ってもおじいちゃんがない。そんなバカな！ボクは家を飛び出して、おじいちゃんの田舎の家に行った。だけど、おじいちゃんはドアを開けてくれず、「ママのところに帰きなさい」と言うだけ。どうして

こんなになっちゃったんだらう・・・？

こんなチェンチェンを泣きながら見つめるおじいちゃんとママ。三人三様の心の葛藤は、見ていると辛い。しかし、これが現実の世界なのだ！

<ひとりっ子政策の功罪>

中国では、結婚しても「共稼ぎ」が原則。そして、1979年以来とられているひとりっ子政策は、中国国内で膨張する人口を抑制する役割を果たしている。しかし他方、改革開放政策の進展により、中国は経済的に豊かになるとともに、「まずできるところから」という鄧小平の政策は、地域間による所得格差の拡大を生み、今やその格差は、1：1.3に広がっていると言われている。そのため、都会の裕福な家庭のひとりっ子は、「小皇帝」と呼ばれて、ワガママいっぱい、ぜいたく三昧に育つという社会的悪影響を及ぼしている。

そんな時代状況とひとりっ子政策をめぐる社会状況は、この映画にも色濃く反映されている。しかし、この映画は、そういう問題を真正面に据えて描くのではなく、おじいちゃんと6歳の孫との心の交流と男の友情(?)をテーマとし、観客の気持をほんのりと温かくさせながら、やんわりとその問題点を考えさせる内容となっている。

<6歳の中国人の「交渉能力(?)」に感心?>

おじいちゃんと別れ、ママと2人の生活を始めたチェンチェンだったが、今日はおじいちゃんの誕生日。おじいちゃんへのプレゼントを何にしようかと、いつも一緒に遊んでいる親友の女の子リンリンに相談したけど、リンリンからいい案は出なかった。そこで、ボクが思いついたのが、バースデーカード。

これを買うため2人でお店へ行き、気に入ったのを選んだら、その値段は8.8元。貯金箱の中にそれ位のお金はあるはずだと思っていたら、これをあけた店員さんが、「足りないよ。別の品物にかえなさい」って。リンリンもお小遣いを足してくれたけど、まだ不足・・・。

そこでボクは、店員さん相手に値段の交渉(?)だ。「今日は、おじいちゃんの誕生日。どうしても、このバースデーカードがいいんだ」「ダメ・・・?」。口だけではなく、表情でも何とか・・・と粘りながらお願いを・・・。ボクの親友のリンリンもこれを援護射撃。「どうしてもこれが欲しいの。お願い・・・」。こちらは女の子らしく、可愛く、笑顔作戦で・・・。こんな2人のチビッコによる、大人タジタジの値段交渉には、さすがの店員も白旗。「私にも死んだおじいちゃんがいいたわ。いいから持っていきなさい」となった。

さすが6歳でも中国人。日本のオトナ顔負けの交渉術を既に身につけている(?)ことに大いに感心・・・。2004年4月に発足した法科大学院の授業でも、このビデオを見させて、こういう交渉テクニックを勉強させなければ・・・と思った次第。

<誕生日のバースデーケーキに立てたろうそく>

誕生日の日、プレゼントを届けにいったボクとリンリンを、おじいちゃんは大歓迎。そして、いっぱいつくってくれていた凧を持って、凧揚げに。しかし、凧揚げで走り回ったせいで、おじいちゃんは疲れたらしく、イスにもたれて半分ウトウト。ここでバースデーケーキを持ったママの登場だ。そこでボクはママに対して、「ママ静かに。おじいちゃんは眠っているんだから」と・・・。

バースデーケーキにろうそくを立てるのも大変。だって、6歳のボクの分ならすぐだけど、おじいちゃんは年をとっているんだから。1本1本ろうそくを立てて、火をつけた。なんてきれいなんだ！この火を吹いて消すのは、おじいちゃんの役目だが・・・？

＜天国のおじいちゃんへ！＞

誕生日の日、おじいちゃんは天国に行ってしまった。ボクは悲しいけど、いいんだ。天国のおじいちゃん宛に手紙を書いて届けるんだから。

今日は、おじいちゃんがつくってくれた凧に手紙をつけて天国へ届けるため、リンリンと2人で野原へ。だけど、最初に凧を揚げるのが難しい。今までは、おじいちゃんが揚げてくれていたんだ。こんな困っているボクに対して、幼稚園からの帰り道、いつもベンチに腰かけて座っていたおじいさんが助け船を出してくれた。このおじいさんも凧揚げがうまいんだ！みるみるうちに凧が揚がっていく。さあ、この凧におじいちゃんへの手紙をつけなくちゃ。

手紙をつけた凧は、更にドンドン上へ上へと。さあ、もうすぐ天国に届くぞ・・・。おじいちゃんはおボクのこの手紙を読んで、きっと喜んでくれることだろう・・・。

＜こんなシンプルな映画、大好き！＞

この映画のテーマは、単純明快なもの。そして、登場人物もほんのわずかだし、派手な動きもない。しかし、この映画は決して観客を飽きさせることなく、その目をスクリーンに集中させてくれる。そして、観ている間ずっと心を暖かくさせ、ストーリーの展開はわかかっていても、ついつい涙がポロリとしてしまう、そんな映画。

ひねったストーリーを工夫したり、派手なワイヤーアクションを次々と繰り出したりしなくても、映画は単純なテーマで人間の気持を豊かにさせ、感動させてくれるものだ。私はこんなシンプルな映画、大好き！

2004（平成16）年7月2日記